

アドルフ・ロース Das Andere ウィーン分離派
 カール・クラウス ペーター・アルテンベルク 虚空へ向けて

0. 序論

⁰⁻¹目的 これまでの建築家アドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933) 研究は、作品分析とそれを補完するための部分的なテキストの分析に大きく偏っていると言える。その原因は、主にそれぞれ異なるコンテキストに基づいて執筆され、各新聞・雑誌上で発表された論稿が著作集というかたちですべて並列的に扱われてきた経緯が大きい¹。特にロースが編集に加担したとされる2冊の著作集²以外に関しては、ロース自身の意図から逸脱し、表面上の意味だけが遊離している場合がある。そこで本論文では、ロースの個々のテキストに関して史料的价值を再考することを第一義とし、その原史料の背景にあるロースの思考の根本を考察する。

⁰⁻²方法 以上の目的を達成する初歩的な試みとして、ロースが刊行した個人雑誌『Das Andere (他者、他のもの)』(fig. 1)を取り上げる。同誌は1903年にウィーンで創刊され、ロースが生涯で唯一個人的に出版を企画したとされるものである。この事実に加えて、前節で述べた目的の達成に資する点は①彼自身による書誌デザインと②すべて彼自身の執筆による内容で構成されていることである。そこでまず第1章において、本誌が発行された1903年に存在した言論の媒体を整理し、第2章でそれらとの比較から同誌の基本的性格を明らかにした。第3章では、第2号発刊後にロースが述べた言葉を基に、タイトルにみる意図や、発刊の企画を考察した。



fig. 1 『Das Andere』第1号表紙

⁰⁻³既往研究 まずアドルフ・ロースの基礎研究として、ブルカルト・ルクショーとロランド・シャッヘルによる『Adolf Loos: Leben und Werk』³を参照した。ただ同書を祖としてロースに関する研究はこれまで多くが為されてきたが、『Das Andere』に関してはその存在が指摘されるにとどまることが多い。『Adolf Loos Sämtliche Schriften 1』⁴などいくつかの著作集に内容が掲載されているが、それは部分的であり、かつ著作集の体裁に合わせて再編集されているものしか存在しない。しかし、そのなかでも独自に『Das Andere』の内容に深く言及している、マッシモ・カッチャーリ「Adolf Loos e il suo

Angelo」(1981)⁵、ジャネット・スチュワート「Fashioning Vienna: Adolf Loos's Cultural Criticism」(2000)⁶を基礎研究として参照した。それぞれ、ロースとペーター・アルテンベルク (Peter Altenberg, 1859-1919)⁷、カール・クラウス (Karl Kraus, 1874-1936)⁸との関係、ロースにおける自己性と他者性の関係について言及している。

1. 世紀末ウィーンの出版事情

¹⁻¹ウィーンの出版界をめぐる動き⁹ 『Das Andere』が創刊されたのは、1900年頃からイギリスなどの影響を受け、ウィーンの出版活動が活発化したことと無関係ではない。特にウィーンでは、新興市民たちが貴族と下流階級とのあいだで自らを差別化する方法を模索していた。そこで、知識や教養の源として書物が大きな意味を持ったのである。その流れが下流階級まで波及すると、印刷技術の発展も相まって出版社は新たな作家や出版物の企画を乱立させていった。このように19世紀末にはウィーンの出版業界は他業界を凌ぐ一大産業と成長していった。

¹⁻²大衆化する新聞 出版業界に大量の資本が投入されるようになり、幅広い種類の新聞が発行されるようになった。『Das Andere』が発行された1903年10月のある日を見ても、確認できるだけで実に30ほどの新聞が発行されている¹⁰。その新聞において、当時最も人々に親しまれたのが文芸欄である。この文芸欄はその存在を定義することは難しいが、歴史学者のW.M. ジョンストンは「カフェで飛び交う冗談のように陽気で、タバコの煙のように消えてゆく」¹¹「カフェで人々は、黒を白といいくるめるかのように議論を楽しんでいる。フュトンはその文字をするものなのだ」¹²と述べており、その特徴は「一時性」や「会話・議論性」にあると言える。

¹⁻³独自の視点による出版活動

¹⁻³⁻¹『Die Fackel (炬火)』ロースと親しい友人であったクラウスが発行していた風刺雑誌である。1899年に創刊され、生涯を通して発行され続けたこの雑誌は、彼が当時のジャーナリズムに対して投げかけた批判の産物であった。ほとんど図版が入らない、文字中心の文書形式のなかで、「オーストリアの刑法と囚人の扱いについて」「警察規約適用の方法について」¹²などの社会的なジャンルを取り上げ、社会に



fig. 2 『Die Fackel』272号表紙

潜むモラルの退廃を訴えた。また特に文芸欄に対して攻撃的であり、文芸欄の権威的存在であった『Neue Freie Presse (新自由新聞)』¹³がしばしば槍玉に挙げられた。

¹⁻³⁻² 『Kunst (芸術)』 同じくロースの友人のアルテンベルクによる雑誌。主内容はアルテンベルクの詩であり、彼が唯一大事にしていた多くの写真¹⁴とともに詩を掲載する形式をとっている。創刊号冒頭文「Kunst」から、アルテンベルクはこの雑誌を通じて、自らの見た世界を共有することを望んでいたことが窺える。そして、多数の写真は自身の詩を補完するものとして用いられた。

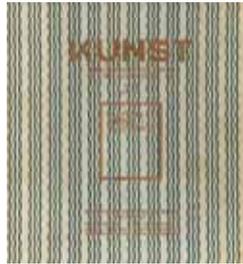


fig. 3 『Kunst』第2号

¹⁻³⁻³ 『Ver Sacrum (聖なる春)』

『Ver Sacrum』は、上記の2者とは反対にロースが敵対視していたとされるウィーン分離派 (Wiener Secession)¹⁵の機関誌であった。1898～1902年のあいだ発行され、分離派の活動報告や文学的なエッセイ、詩などを掲載した。特徴的なのは、その冊子デザインであり、「デザインがチームで行なわれ、責任者が常に入れ代わっていた」¹⁶ため毎号のように異なる見た目を持っていた。また、多くの挿絵が文中に入れられ、非常に複雑な文字組を持っていたことがわかる。



fig. 4 『Ver Sacrum』創刊号

2. 『Das Andere』の内容とその特徴

²⁻¹ 『Das Andere』基本情報 1903年10月1日に創刊、2週後の10月15日に第2号¹⁷が発行された。「オーストリアに西方の文化 (Abendlaendischer Kultur) を導入する雑誌」というサブタイトルがつけられ、記事内容、広告、レイアウトなどすべてがロースによって決定されている。また創刊の経緯には特殊な事情がある。第1号は、前述の『Kunst』創刊号の付録として発行された。しかし第2号は完全に離別し、独立して発行された。ただし、2号においてもレイアウトなどを含め大きな変更点はほとんどない。

²⁻² 文書形式の特異性 本誌の特徴として、大きく3つ挙げられる。まず第一に、フラクトゥール¹⁸の不使用である。ロースはこの点に関して、読者が当時ウィーンの出版界で一般的であったことを認めながらも、あえてそれを用いないことを表明している¹⁹。第二に、ロース自身によるレイアウトという点がある。文字組の観点からいえば、『Die Fackel』に類似しており、『Ver Sacrum』や『Kunst』に反して、クラウスがそうしたようにテキストをそれ単体で見せる意図が垣間見える。そして最後に無料の企業広告が掲載された点である。この点に関してロースは「考えを証明するために」²⁰広告を掲載していたことを示唆しており、ロースの思考を強く反映するものであると言える。

²⁻³ コンテンツの特異性

²⁻³⁻¹ 1898年論稿²¹との関連性 ロースは、アメリカ、イギリスへの旅行²²からウィーンに戻った1896年の2年後、『Neue Freie Presse』紙上に多数の批評文を寄稿した。本誌には、それら一連の論稿と一致点が散見される。例えばロースが「近代的な装いとは、最高の社会に属し、時と場合に合わせ、西欧文化の中心で目立たないものである」²³と語る内容は、1898年の「紳士のモード」²⁴における内容と同一のものである。それは、ロースが1898年以降の5年間で変わらず同じ主張をし続けていたことを裏付けるものであり、ロースの理論発展を考察する上で重要な点である。

²⁻³⁻² 文芸欄の性格 第1章で述べた文芸欄の特徴に基づいてみると、本誌におけるテーマ設定の特異性が明らかになる。ロースの選んだテーマについて、既往研究において『Die Fackel』との類似性が指摘されている²⁵。しかし、クラウスと同じく法律や社会的モラルの問題に触れる一方で、ロースはまったく違った方向性のテーマを選定している。例えばそれは、「茄子の調理法」「ヴェネーディヒ (遊園地)」²⁶「ケーキウォーク (ダンス)」といった日常や娯楽的なものである。これはロースの生涯を通じても特異なテーマ設定であると言える。また主観的な表現が1898年に比して増加しており、演劇批評においては、ロースの独白ととれるようなものも見られる²⁷。

²⁻³⁻³ 周辺関係図 本誌のもう一つの特徴はその広告にある。ロースが独自に選び出したとされる広告²⁸には、ロースの趣向が多いに反映されている。例えば、仕立屋ゴールドマン&ザラチュ (Goldman & Salatsch)²⁹はその象徴である。これはロースが最も好んだ仕立屋で、あえて表紙に用いられている。これは、他誌にも見られない特徴的な点であり、ロースがこれを「西方の文化」と強く結びつけていたことが見てとれる。またそれ以外の広告には、妻リナの両親が経営する「カフェ・カーサ・ピッコラ」、「ヨゼフ・ファイリヒ」や「ヨゼフ・クロプフロイター」などロースが重用した家具職人の名前が頻出する。

²⁻³⁻⁴ 独自の教育観 本誌において最も特徴的であるといえるのは、「投書欄」³⁰である。この欄は第1号の「どう生活するか」が発展したもので、第1号を読んだ読者の投書に対するロースの回答が掲載されている。ここにおいて特異なのは、読者の質問自体は公開されず、他の読者はロースの回答のみ見ることができる点である。それによりこの欄はより具体的でより個人的な話題に終止している。しかしそれはロースの教育観を表しているとも言える。つまりそれは (ロースの認識では) ホフマンの一方的に知識を押しつける教育に対する批判³¹であり、問題の共有とその根本的な解決を求めるロースの意図が見てとれる。

²⁻⁴ 廃刊の経緯 たった2号で廃刊となった『Das Andere』

であるが、その理由は設計依頼の増加にあったとされている³²。ロースは1903年に11件、1904年には10件の設計を担当している。もちろんプロジェクトの大小はあるが、これはロースの生涯のなかで最も多い。つまり1904年1月末の時点では、第3号以降の発行に意欲をみせていただに、設計活動に時間を取られ、『Das Andere』新号の執筆にかかることができなかつたというのが大きな理由のひとつであることはほぼ間違いないと言える。

3. 個人出版の企図とロースの思想的断片

本章では、第2号の発行から3カ月経った1904年にロースが別誌に語った文章³³を基に、『Das Andere』発行の企図や背景を分析した。

³⁻¹ **発刊の目的** ロースは上記発言において、「この雑誌の目的は、私自身の仕事を楽にすることである。すなわち、住居を正しく設えるという仕事だ」と述べている。この大目的で意味されているところは、続く文章で「西方の文化の紹介」と「分離派からの脱却」の大きく二つであると理解できる。まず第一にサブタイトルにもある「西方の文化」であるが、これは『Das Andere』の内容からすれば、1898年論稿にもみられるようにアメリカやイギリスの文化を指すと考えられる。本誌にも両国の名前は各章内に必ず登場し、オーストリアとの比較対象として取り上げられている³⁴。同時にオーストリアにおける貴族文化がこれに同等のものとして捉えられていることも、その扱いから明らかである³⁵。また「分離派からの脱却」については、第2号「(はじめに)」³⁶など随所において分離派を名指して批判する箇所が見られる³⁷。ロースはこのように明確な目的を持ち、それに忠実に内容を選定、執筆していたといえる。

³⁻² 『Das Andere(他者)』という

タイトル タイトルの決定に際して記された箇条書きの書面が残されている。これをみると、「外国の」「自身の」「正しい」「西方の」といったワードが挙げられており、ロースが目的を意識してタイトルの選定を行っていたことが明らかになった。ジャネット・スチュワート(2000)



fig. 5 『Das Andere』表紙エスキース

他の既往研究においては、本タイトルはヘーゲルの自己と他者の問題にその思想の原点をみることができ、「他者」には「オーストリアに対するアメリカ、イギリス」をはじめ、さまざまな含意が為されていると指摘されている³⁸。しかし本論文では、新たな観点を見いだすことができた。それは、「生活と芸術の差別化」という点である。『Das Andere』が付録されていた『Kunst』のサブタイトルには「芸術とその他すべてのものに関する隔週刊誌」³⁹とある。

この「その他」が「Andere」に相当するが、そもそもロースは1898年論稿において、たびたび芸術と実用品の分離について主張していた。それは一方で、総合芸術と称して芸術と実用品の融合を目指していた分離派に対する批判でもあった⁴⁰。つまりこのタイトルの本来の意味は、上記の目的を鑑みて考えれば、分離派批判のひとつにもなっていたといえる。そしてまた、上記既往研究が指摘する内容をふまれば、この「Das Andere」というタイトルが主張されている目的の双方に対応していたといえることができる。つまりエスキース段階でロースが試行錯誤したものが決定されたタイトルに含意として結実したといえるのである。

³⁻³ **建築家としての立場** またロースは目的について語った文章の冒頭で自身を「建築家である」と述べている。つまり、ロースはこの雑誌を単なる文筆家や知識人としてではなく建築家として発行したということになる。ここでロースの建築家像が明らかになる。1898年論稿において、ロースは建築家の使命は「暖かく快適な空間をつくり出すこと」と「骨組み(構造)を發明すること」であると述べている⁴¹。しかし、この雑誌においては「骨組み」については触れられていない。つまり建築家の役割のひとつである「内装」のみに関してここでは触れていると考えられる。しかし本誌では、一見すればこの構図を崩すような発言がみられる。それはある投書に対する「住居を設えることは建築とはなんの関係もない」というものだ⁴²。しかしロースは、「今後も商店、カフェ・ハウス、そして住居を設えることを続けるでしょう」と述べ⁴³、それが自身の仕事であるという認識を崩してはいない。つまりロースは、施主に対して「助言をする」ことが「内装」における建築家の役割であるという考え方をしていたと解釈できる。投書に対して返答するという「投書欄」の手法を用いたことから、ロースが施主との応答を通じた設計という建築家像を持っていたといえるのである。この点を踏まえると、ロースに「文化を知らぬ者のためのガイドである」⁴⁴と称された本誌に、西方文化を紹介することで、助言する際に求められる労力を削減する意図が込められていたことが明らかになるのである。

4. 考察：相対化された主張

以上のように分析を進めた上で、本章では目的を達成するために個人雑誌という形式をとった理由について考察する。

⁴⁻¹ **経済的困窮** ロースは35編もの多量の論稿を発表した後、ほとんど文章を残していない。最後に論稿を発表したのは1900年4月で『Das Andere』を発刊する1903年まで確認できる限り1編も残していない。一方設計活動は1899年にウィーンでも話題となった《カフェ・ムゼウム》⁴⁵を完成させたこともあり、1900年にも5つの作品を残している。ところが、1901～1902年はたった1つし

か設計を行なっておらず⁴⁶、こちらも執筆活動同様に停滞している。ここからも容易に想像できる通り、もともと浪費家であったロースは明らかに経済的困窮に陥っていたといえる。ロースが1902年に結婚した妻リナの手記によれば、結婚した当初、アパートを借りるためリナの両親に家賃を肩代わりしてもらっていたほどであった⁴⁷。そもそも1896年にウィーンで活動を始めたロースは、批評家としてキャリアをスタートさせている。そこでロースは建築に関しても言及し、建築家としての知名度を獲得していったと言える。しかし、執筆活動が停滞したことで設計の依頼も徐々に減少していったのではないかと推察できる。特に、ロースが後に述べるように、彼は建築雑誌に自身の作品が掲載されることを嫌った⁴⁸。また同時にそれまでの彼の設計の半分は住宅の内装であった。そのため、彼の業績や理論が広く人々に知れ渡るのは、彼の執筆した文章を通してのみであったといえるのである。つまり、執筆活動も設計活動もままならないなかでロースは建築家としての立場の危機に立たされていたと考えられる。逆に『Das Andere』を発行した1903年とその翌年の1904年には前述のとおり、多くの設計依頼が舞い込んでいる。ここに、ロースの個人雑誌発行の真の意図がみえてくるのだ。



fig. 6 『Das Andere』第2号ポスター

⁴⁻² 教育者意識の裏側 「この欄で私は読者を目利きに教育しようと考えている」と述べるように⁴⁹、たしかにロースには独自の教育観が見られる。特に「投書箱」に象徴される読者とのやり取りを重要視したとも言えるが、前述のような状況において個人雑誌を発行したと仮定すれば、このやり取り自体が潜在的な施主の発掘を目的としたものであると考えることもできる。しかしそうして考えると、本章冒頭で挙げた文章において、「私は、その冊子を一年間だけ発行しようと考えている」と発言しているのにもかかわらず、設計依頼が増加した結果、それ以降の発行を断念したことも合点がいく。またさらに踏み込んで言えば、食事のマナーや手紙の書き方にまで及ぶテーマ設定は、日常的话题について清潔さや道徳的正しさなど近代的な社会で求められるものを訴えることで、それ以外の主張を相対化して説得力を持たせようという意図があったとも言える。それは、所々に挿入される西方の文化にも、そして分離派にもまったくつながりようがない話題に象徴されている。たとえば、「投書箱」でロースが女性のエスコートの仕方に関して述べるとき、それはもはやイギリス文化とも言えず、単なる道徳的礼儀の話なのである。こうしたどう

転がっても否定されようがない主張を随所に織り交ぜることで、ロースは本来の西方文化の紹介と分離派からの脱却という目的に合う部分に相対的説得力を持たせようとした可能性がある。

5. 結論

これまで既往研究で部分的にしか触れられてこなかった『Das Andere』を総体として評価することができた。そしてそれは、1898年論稿に強い類似性を持っていることが明らかになった。またその背景には、「芸術と実用品の分離」や「施主との応答を通じた設計」といった独自の思考があり、その一部がタイトルや「投書箱」といった形式を通して発露されていることがわかった。さらにこれは、ロースの生涯の執筆活動を通じて「文芸欄の性格」を持っている点で希少な存在である。また、以上『Das Andere』の基本的性格と思想的背景を明らかにした上で、最後に発刊の理由のひとつとして経済的困窮の打開と、建築家としての自らの立場を確立しようとするロースの戦略的な意図があった可能性を指摘できた。

謝辞

本論文執筆にあたって、『Das Andere』翻訳の校閲をしてくださった加藤淳様に厚く御礼申し上げます。

1. Janet Stewart (2000), Fashioning Vienna -Adolf Loos's Cultural Criticism-, New York: Routledgeを参照。 2. *Ins Laere gesprochen 1897-1900* (G. Crés & Cie, 1921) と *Trutzdem Gesammelte Schriften 1900-1930* (Brenner-Verlag, 1931) の2冊。 3. Burkhardt Rukschcio, Roland Schachel, *Adolf Loos: Leben und Werk*, Residenz, 1982。 4. Adolf Loos, Franz Glück, *Adolf Loos Sämtliche Schriften*, Verlag Herold, 1962。 5. Massimo Cacciari, *Adolf Loos e il Suo Angelo: "Das Andere" e Altri Scritti*, 1981。 6. Janet Stewart, *Fashioning Vienna: Adolf Loos's Cultural Criticism*, Routledge, 2000。 7. オーストリアの作家、詩人。ロースとの親交が深く、カフェでよく議論を重ねた。『Die Fackel』は彼が創刊、編集を行った雑誌のこと。彼は、ロースも寄稿していた『ノイエ・フライエ・プレッセ』紙の既存権力を保護するような方針に反旗を掲げ、独特の言い回しによって強い批判を行った。 9. W. M. ジョンストン『ウィーン精神』(井上 修一、林部 圭一、岩切 正介訳、みすず書房、1986)、山之内克子『ウィーン・ブルジョアの時代から世紀末へ』(講談社、1995)などを主に参照した。 10. 当時の新聞が一部、オーストリア国立図書館HP内のANNO (Austrian Newspapers Online) でデジタル化されているため、そちらを参照した。 11. 前掲『ウィーン精神』p.180。 12. 『ウィーン精神』p.182。 13. 池内紀『間にひとつ炬火あり』(筑摩書房、1985) p.57。 14. アルテンベルクは、大量の写真を所有し、部屋の壁一面にそれらを飾っていた。 15. 1897年にウィーンの建築家ヨゼフ・ホフマンらによって結成された芸術団体。当時ヨーロッパの潮流であったアール・ヌーヴォーの影響を受け、装飾的な作品を多く残した。 16. Christian Brandstaetter, *wien um 1900*, Brandstaetter Verlag, 2005, p.67, 筆者訳。 17. 『Das Andere』は実際には2号で廃刊となったため、この号が最終号ということになる。 18. ドイツ文字、ひげ文字とも呼ばれる書体のこと。中世ヨーロッパで広く使われた書体で、ウィーンでも多くの19世紀末の出版物にはこの書体を用いられていた。 19. Adolf Loos, *Das Andere*, Nr.1, p.5。 20. Adolf Loos, *Das Andere*, Nr.2, p.9。 21. ロースが1898年に『Neue Freie Presse』に発表した一連の論稿を指す。 22. ロースは1896年にウィーンに戻るまでの数年間をアメリカ、イギリスで過ごしている。そのときに得た知見が後のロースの主張の根源にあるとされている。 23. 前掲 *Das Andere*, Nr.1, p.8。 24. 「紳士のモード」『虚空へ向けて』(編集出版組織体アセテート、2012) p.67。 25. 前掲 *Adolf Loos e il suo Angelo*。 26. ヴェネツィアをウィーンに再現するという趣旨のもと、1895年にウィーンのブラッターに開園した遊園地。現在も大観覧車が残る。 27. 前掲 *Das Andere*, Nr.1, p.5。 28. 新聞に掲載されていた広告から図版を切り出して用いたと考えられるものが見られる。 29. ウィーンの宮廷御用達の仕立屋、紳士服店。ミヒヤエル・ゴールドマン (Michael Goldman, 1843-1909) によって設立され、ウィーンでもっとも権威ある仕立て屋のひとつであった。 30. 前掲 *Das Andere*, Nr.2, p.8。 31. 第2号「(はじめに)」に掲載された馬具職人に関する記事に顕著。前掲 *Das Andere*, Nr.2, p.1。 32. 前掲 *Adolf Loos: Leben und Werk*, p.85。 33. "Das Leben — Ein Blatt zur Einführung Abendländischer Kultur in Österreich", *Die Zukunft*, 1904. 01. 30。 34. たとえば第1号「国家はどのようにわれわれの面倒をみるか」など。 35. 前掲 *Das Andere*, Nr.1, p.10。 36. 誌面上では章タイトルはつけられていないが、本論文では便宜的にこう呼ぶ。 37. 1898年論稿では、明らかにホフマンを指して「工芸学校の教授」と呼ぶことはあるが、「分離派」と直接述べる箇所は見られない。 38. 前掲 *Fashioning Vienna: Adolf Loos's Cultural Criticism*, p.36。 39. HALBMONATSSCHRIFT FÜR KUNST UND ALLES ANDERE (Peter Altenberg, *Kunst*, "Kunst" Verlag, 表紙) 40. 分離派の思想の特徴は、芸術の生活化・生活の芸術化をもとめる動きであった。 41. 「被覆の原理」前掲『虚空へ向けて』p.177。 42. 前掲 *Das Andere*, Nr.2, p.8。 43. 前掲 *Das Andere*, Nr.2, p.8。 44. 前掲 *Das Andere*, Nr.2, p.8。 45. この建物は、内装のその簡素性から「カフェ・ニヒリズム」などと揶揄された。 46. (K. K. Priv. Allgemeine Verkehrsbank) (1901)。 47. Lina Loos, *Das Buch Ohne Titel*, Deuticke, 1996, p.71。 48. 「私のデザインした室内がまったく写真に向いてないということに、私はたいへん誇りを感じている。……私の書架は、建築雑誌で発表されるなどということに先だってある」『建築について』(Der Sturm, 1910. 12. 15)。 49. 前掲 *Das Andere*, Nr.1, p.2。